

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24530886

研究課題名(和文) 犯罪・非行のリスクアセスメント

研究課題名(英文) Risk assessment of crime and delinquency

研究代表者

森 丈弓 (Mori, Takemi)

甲南女子大学・人間科学部・准教授

研究者番号：00512154

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：少年鑑別所に入所した非行少年について調査を実施し、平均して500日間の追跡を実施した。統計解析を実施した結果、リスクアセスメントツールの総合得点が、概ね2年以内という比較的短期間には非行少年の再犯リスクと強い関係を持つことが判明した。また、合計得点によって非行少年が再犯リスクが異なる群に分類できることが分かり、対象者の処遇・教育方法を選択する際の実証的な基準が示された。この知見は、リスクアセスメントを適切に実施して非行少年の再犯を防ぐ上で重要な知見と言える。

研究成果の概要(英文)：A follow up survey was conducted on juvenile offenders who entered the juvenile classification home. An average of follow up period was 500 days. As a result of the statistical analysis, I found that the total score of risk assessment tool had a strong relationship with the risk of recidivism in a relatively short period (about two years). In addition, I found that the juvenile offenders could be classified into different groups depending on the total recidivism risk score, which revealed empirical criteria for selecting treatment and education. This finding was an important finding in carrying out risk assessment appropriately and preventing reoffending of juvenile offenders.

研究分野：犯罪

キーワード：再犯 リスクアセスメント 生存時間解析

1. 研究開始当初の背景

リスクアセスメントとは、犯罪の性質や個別の状況、態度、信念を評価し、それによって少年が将来的に法律に沿った生活ができるよう援助するのに必要な介入のタイプを明確にすることである(Youth Justice Board, 2006)。我が国においては再犯リスクに関する実証的な研究が乏しく、非行臨床の現場において実証的な裏づけのあるリスクアセスメントの実施がほとんどなされていない状態であった。

2. 研究の目的

本研究は、第3世代リスクアセスメントツールである Youth Level of Service Inventory の日本語版を作成し、信頼性、妥当性及び我が国の非行少年に対する適用可能性を検討することを目的としている。本研究の成果を元にして我が国の非行臨床にエビデンスに基づいたリスクアセスメントを導入することが可能となる。

3. 研究の方法

非行少年の犯罪に及ぶリスクファクターを査定するための日本語版の基準を作成することが必要となるが、その作成にあたって、リスクアセスメントは実際に少年非行を扱う現場である捜査機関、司法機関、収容・教育施設の業務に密接にかかわっているため、単純に日本語に翻訳するのみでは使用に耐えるものとはならない。よって、現場の第一線で稼働する法務省の法務技官、家庭裁判所の調査官からヒアリングを行い、その意見を踏まえて基準の修正・改良を行った。

また、日本語版を作成したリスクアセスメントツールを用いて、実際の非行少年に対してリスクアセスメントを行った。調査が行われた非行少年に対して、その後の社会内での再犯の有無を調査し、追跡データの確保も実施した。調査対象となる非行少年は、これまで我が国で行われてきた研究では、施設収容となった非行少年を対象とした研究しか行われてこなかったところ、本研究では、事件を起こして家庭裁判所に係属したものの、少年鑑別所に入所しない、いわゆる在宅事件について、家庭裁判所調査官と連携し調査を実施した。これによって、非行深度の浅い非行少年から深い非行少年まで幅広く資料を得て妥当性の検証を実施することが可能となった。加えて、少年院送致になった非行少年が、更生して再び犯罪を犯さないよう改善更生が達成されたのか、あるいは再犯に及んだかについても調査を実施し、少年院処遇の効果検証を行った。

4. 研究成果

非行少年に対して本研究によって今回作成されたリスクアセスメントツールを使用し、再犯リスクの程度について査定を実施した。

まず、非行性の検証として、再犯リスクの高い者ほど家庭裁判所の審判決定で重い処分を受けているか否かを検証した。これは少年審判における決定毎の YLS/CMI 合計得点の違いを分析することによって検討された。その結果、社会内処遇である保護観察よりも施設内処遇である少年院送致の合計得点が高いことから、重い処分を受けた非行少年ほど合計得点が高いことが示された。すなわち、審判で重い処分を受けた非行少年ほど再犯リスクが高いことが確認できた。この結果は、家庭裁判所の審判決定を外的基準とした YLS/CMI の基準関連妥当性が確認されたことを示している。また、再犯リスクが家庭裁判所の審判決定において重要な要素になっていることが明らかになったとも言える。

再犯リスクが家庭裁判所の審判決定に大きな影響を与えていることは、少年審判において対象者の社会的危険性に関する評価が少なからず考慮されていることを示している。再犯リスクが高い、すなわち、そのまま社会内に戻った場合に再び犯罪に及び、被害者を増やしてしまう可能性が高いと考えられる者に対して、施設収容という身柄拘束を伴うより重い処分が選択されやすくなっていることになる。

Figure 1 は少年鑑別所に入所した男子の非行少年について再犯リスクの程度によって、予後の再犯率がどの程度異なるかを生存時間解析の一手法である Kaplan-Meier 推定法を用いて検証したものである。今回作成されたリスクアセスメントツールによって、非行少年のリスクの程度を、低リスク、中リスク、高リスクと3つに分類したところ、低リスク、中リスク、高リスクの順に社会内に釈放後、順次再犯をしやすくなっていることが確認された(Log-Rank Test, $p < 0.01$)。

我が国の非行少年サンプルに対して行われたリスク分類では、各リスク群間に再犯率の有意な違いが認められ、本分析によって日

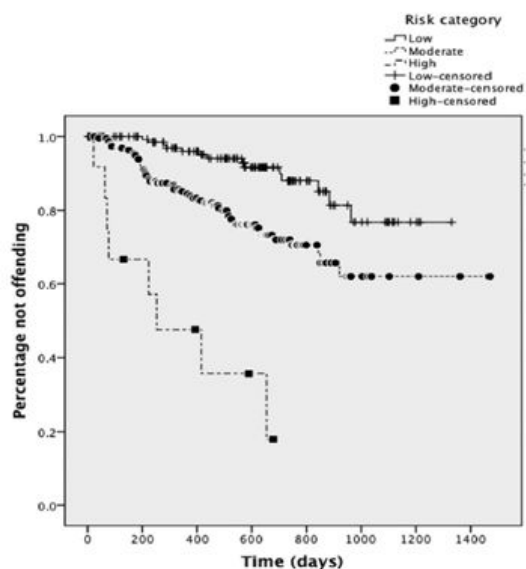


Figure 1. Survival curves for original cutoff-based risk groups.

本の非行少年により対応した再犯リスクの分類が行われたことになる。少年審判に関わる非行臨床の専門家はこの YLS/CMI 合計得点をもとに、自分が担当する非行少年がどの程度の再犯リスクを有しているかを容易に判断することが可能となる。このことは、非行少年の審判決定等の処分に係る意見を定めるに当たって、非行少年の社会的危険性の程度及び再犯防止に必要とされる処遇の密度に関する実証的根拠のある資料として本ツールが活用できることを示している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

森 文弓 (2015). 少年用サービス水準/ケースマネジメント目録(YLS/CMI)について 甲南女子大学研究紀要人間科学編, 52, 17-23. 査読なし

Takahashi, M., Mori, T., & Kroner, D. (2013). A cross-validation of the Youth Level of Service/Case Management Inventory (YLS/CMI) among Japanese juvenile offenders. *Law and Human Behavior*, 37(6), 389-400. 査読あり

[学会発表](計9件)

森 文弓・菅藤 健一・松田 芳政・梶間 幹男・高橋 哲・嶋田 美和・三谷 厚・丸山 もゆる・相澤 優・石黒 裕子・関谷 益実・内山 八重・小野 広明・吉澤 淳・大淵 憲一・川田幸司. 3Gリスクツールによる非行少年のリスクアセスメント(7). 日本犯罪心理学会第 53 回大会. 東北大学. 平成 27 年 9 月 27 日.

嶋田 美和・森 文弓. YLS/CMI による家庭裁判所係属少年の再犯リスク査定. 日本犯罪心理学会第 53 回大会. 東北大学. 平成 27 年 9 月 27 日.

梶間 幹男・森 文弓・高橋 哲・菅藤 健一・三谷 厚・丸山 もゆる・相澤 優・石黒 裕子・内山 八重・小野 広明・吉澤 淳・大淵 憲一. 3Gリスクツールによる非行少年のリスクアセスメント(6). 日本犯罪心理学会第 52 回大会. 早稲田大学. 平成 26 年 9 月 7 日.

Kazumi Watanabe, Hideo Okamoto, Takeshi Arai, Kaeko Yokota, & Takemi Mori. Prediction of Offender's Behaviors. 6th Annual Conference Asian Criminological Society. Osaka University of Commerce. 2014.6.29.

高橋 哲・森 文弓. 臨床家の再非行予測はリスクアセスメントツール増分に寄与するか?. 日本犯罪心理学会第 51 回大会. 大阪教育大学. 平成 25 年 9 月 29 日.

梶間 幹男・森 文弓・高橋 哲・菅藤 健一・三谷 厚・丸山 もゆる・相澤 優・石黒 裕

子・内山 八重・小野 広明・吉澤 淳・大淵 憲一. 3Gリスクツールによる非行少年のリスクアセスメント(5). 日本犯罪心理学会第 51 回大会. 大阪教育大学. 平成 25 年 9 月 28 日.

森 文弓・高橋 哲・菅藤 健一・三谷 厚・丸山 もゆる・相澤 優・石黒 裕子・内山 八重・小野 広明・吉澤 淳・大淵 憲一. YLS による再犯予測テーブルの作成. 日本犯罪心理学会第 50 回大会. 大正大学. 平成 24 年 9 月 9 日.

角田 亮・森 文弓・高橋 哲・岡部 梨奈子. 矯正施設における処遇プログラムの効果検証を巡る諸問題(2). 日本犯罪心理学会第 50 回大会. 大正大学. 平成 24 年 9 月 8 日. 高橋 哲・森 文弓・角田 亮・岡部 梨奈子. 矯正施設における処遇プログラムの効果検証を巡る諸問題(3). 日本犯罪心理学会第 50 回大会. 大正大学. 平成 24 年 9 月 8 日.

[図書](計2件)

森 文弓 (2016). 犯罪リスクと暴力 大淵 憲一(監) 紛争・暴力・公正の心理学 (pp. 252-263) 北大路書房.

森 文弓・角田 亮 (2015). 非行少年の再犯リスクと再発予防の取組 大川一郎・濱口佳和・安藤智子(編) 生涯発達の中のカウンセリング (pp. 128-148) サイエンス社.

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

森 文弓 (Mori Takemi) 甲南女子大学・人間科学部・教授

研究者番号：00512154

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
()